



小田実全集（評論 第33巻）

9.11 と 9 条 (上)

小田実 平和論集



小田実全集  
講談社  
Makoto Oda



## 目次

はじめに

### I

「九・一一」と「九条」

### II

『何でも見てやろう』より

愛国心について

特攻機のゆくえ

「難死」の思想——戦後民主主義・今日の状況と問題

「私は、私たちが」になった」

平和の倫理と論理

「ふつうの人間」の「国際連帯」

人間としての思想と行動

9

12

62

64

67

74

106

124

173

192

「物」と「人間」——佐世保・一九六八年一月

軍隊の問題、あるいは、「米軍解体」

「生きつづける」ということ——一九七一年以後

「生きつづけること」と「参加の継続」

下巻目次

II

「アウシュビッツ」と「デイル・ヤシン」  
憲法よみがえりを求めて

——「安保闘争」「憲法再生闘争」の倫理と論理

最後に「PKO後の日本」で考える

安保ではなく「平和友好条約」を

論文評価報告

どんづまりからの認識、思想

「良心的軍事拒否国家」めざせ

III

「西雷東騒」・「新西雷東騒」

「若狭のアテナイ」としての小浜

いったい彼らは何のために殺されたのか

「災害大国」としての日本、アメリカ

ラジオ・ドラマ「GYOKUSAI」の「メッセージ」

「大東亜戦争」を再考する

市民の政策づくり「教育」への「提言」

デモ行進と市民社会の成熟

私の「反戦」の根拠

新しい時代を生きよ

神風は吹かなかった

「平和憲法」実践の積極的提案を

裁判所は何のために、誰のためにあるのか

痛快でいい夢

最も理想的であることが最も現実的

逆の方向への転換を

住居は人権、金儲けの対象にあらず

おびただしい数の死者を二度と出してはならない

林京子の「そのとき」

黒煙のなかで——作家で平和活動家の小田実との対話

少し長いあとがき

9・11と9条(上)

——小田実 平和論集





## はじめに

本は読者がどう読んでもいいものだが、書き手、つくり手の著者として、次のように読んでいただければ幸わいである。

まず、「Ⅰ」の『九・一一』と「九条」が。これがこの本の根幹をかたちづくる。

次いで「Ⅱ」「Ⅲ」。この根幹に至る、あるいは、そこから発する私の平和にかかわつての認識と思考の集大成となる「平和論集」。一九六一年に世に出した『何でも見てやろう』（河出書房新社）から始まって二〇〇六年に至るまでの文章の集積だから、「平和論集」の認識と思考の時間の幅は四十五年に及んでいる。まさに「集大成」と言つていい。

「Ⅱ」は『良心的軍事拒否国家』めざせ』（『朝日新聞』二〇〇〇年六月一八日）までの論、「Ⅲ」は「西雷東騷」「新西雷東騷」の、『若狭のアテナイ』としての小浜』（『毎日新聞』二〇〇五年七月二六日）に始まる最近のもの——二つに分けたが。この論集は、博物館の陳列のような回顧文集ではない。現代——「九・一一」以後の現代にそのままむき合う、むき合い得る、そうあることを期して文を選び、かたち

つた論集である。

時間的に「Ⅱ」と「Ⅲ」のあいだの時期に書いた私の認識と思考は、昨年、世に出した『思索と発言Ⅰ』

2』二卷（岩波書店、二〇〇五）に収めたので、この本に収録していない。そちらを読まれるといい。  
〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕をお読みになった上で、アメリカ人ジャーナリスト ブライアン・コヴァート氏のインタビュ―「黒煙のなかで」を読まれるといい。これは彼自身の思い、問題意識も入った出色のインタビュ―だ。

そのあと、全体のしめくくりともいえる、必要な書き加えともなる少し長い「あとがき」をつけた。

では、それが誰であれ、読者諸氏よ、読んでくれたまえ。

I

## 「九・一一」と「九条」

### 1

私は、日本の憲法、その根幹にある「九条」は日本にとつてはもちろんのこと、世界全体にわたつて重要だと考えている。以前から考えていたが、ことに五年前、二〇〇一年九月一日、今や「九・一一」という言い方で歴史に刻み込まれた事件がアメリカ合州国で起こつたあと、あらためてそう考へて来ている。

「九・一一」の事件自体については、今さらここでくわしく述べるまでもないだろう。「アルカイダ」と言われる（「言われる」であつて、今に至るまで確証はない。この事件でアメリカ合州国は「アルカイダ」との「連関」を口実にしてアフガニスタンに「報復戦争」をしかけてタリバン政権を打倒し、そのあとイラクが「大量破壊兵器」を持つていると言われているとして戦争をしかけ、フセイン政権をぶつ壊した——というぐあいにも「言われる」が多すぎる）イスラム原理主義者の過激派の一団が民間航空機を乗っ取つてニューヨークの「世界貿易センター」の超高層建築の双子の建物二つに「自爆攻撃」をかけ、建物を倒壊させて多数の市民の死傷者を出した事件が「九・一一」だが（ワシントンのペンタゴンの建物も彼らの自爆攻撃を受けている）、今、人が「九・一一」と言うとき、そのことはが意味することは九月一日の事件自体にとどまっていけないにちがいない。私自身をふく

めて言うことだが、世界で今多くの人が、事件のそのあとの事態の進展をも入れて「九・一一」を考えている。

そのあとの事態の進展は、ひと口に言えば、「テロ撲滅」の大義名分の下で二〇〇一年以来世界大にひろがるかたちで行なわれて来ている、ブッシュ政権下のアメリカ合州国のそれがもつ強大な軍事力にものを言わせての力のゴリ押し政治の世界大の規模においての展開だが、その力のゴリ押し政治の展開によつて「九・一一」以後の世界は、それまでの世界とはまったくちがったかたちのものとして存在し始めて来ている。私が、日本の憲法——「九条」をもつ「平和憲法」が日本にとつてだけではなく世界全体にとつて重要だとあらためて考えて来ているのは、世界のその状況のなかにおいてのことだ。

## 2

「九・一一」の事件以後に起こったことを手短かにまとめて書いておこう。

前提として述べておきたいのは、「九・一一」以前にブッシュ政権下のアメリカ合州国がこの二一世紀を「アメリカの世紀」として、長年の冷戦構造崩壊後の世界を、アメリカ合州国伝来の（それはアメリカ合州国、アメリカ人に課せられた天来の神託だとアメリカ人の多くが信じている）「民主主義と自由」の擁護の大義名分の下にアメリカ合州国中心、アメリカ合州国支配の世界に、それがもつ強大な軍事力を背景にしてつくり変えようとする野心をもつて来ていることだ。この野心を実現するにあたり、軍事力をさらにいっそう強大なものにするともに、アメリカの軍事力が存在し、使える

範囲をさらに拡大して、世界のどこにでも出動して戦争できる態勢をつくりあげる必要があると強力にまさに臆面もなく主張したのが、当時「ネオコン」と呼ばれてブッシュ政権をつくり出すことに主導的役割を果たして、今もその中枢にいる「新しいアメリカの世紀のための計画」立案委員会の学者やら役人やらの一群の人たちが書いて二〇〇〇年に発表した「アメリカ防衛の再建」と題した報告書だが（この報告書の副題は「新しい世紀のための戦略、戦力、資源」だ）、この「新しいアメリカの世紀」実現のために「九・一一」事件ほど絶妙な機会をあたえた事件はなかつたにちがいない（事件はアメリカの自作自演だったという説さえがある）。以後、アメリカ合州国は、この報告書に書かれていた通りに、世界制覇の道を強引に、また着実に進みつつあるように見える。

「九・一一」のあと、まず、行なわれたのは、今少し言及した、「アルカイダ」との「連関」を口実にしてのアフガニスタンに対する「報復戦争」だった。そのとき使われた戦争の口実は、これまでのアメリカの戦争でいつも使われた古典的な「民主主義と自由」の擁護に新しくつけ加えての「テロ撲滅」だったが、この二つの大義名分の下、アフガニスタンの当時のタリバン政権を打倒したあと、多分にアメリカの傀儡政権の色濃い親米政権を力づくで打ち立て、今度は同じ大義名分の下、今はそのすべてがマヤカシであることが明らかになった「大量破壊兵器の保有、隠匿」を攻撃の大義名分につけ加えて、イラクに戦争をしかけて、フセイン政権を打倒し、ここにもまたアメリカ好みの政権をつくり上げようとしてあれこれ動いて来ている。しかし、それはうまく行っているのか。

イラク戦争での勝利宣言後もうすでに長い年月が経つていながら、いまだに連日何かの事件が起こって国内の治安は安定せず、いや、悪化してさえ来ている、イラク駐留のアメリカ軍をいくら増強

しようと、事態は問題の解決の方向に向かっているとは決して言えない。私がかここで思い出すのは、ベトナム戦争のさなか、いつまでも終結の見込みがないなかで、よく言われたのが、今やトンネルの出口が見えて来たというアメリカ政府側の弁解の言辞だったことだ。これは「今度こそ……」というつけ加えつきで何度もくり返されたが、ついにアメリカ合州国はトンネルの出口を出ることなく惨めな敗北に終わった。

今、アメリカ国内では多くの人がイラク戦争とベトナム戦争の類似を言い出し始めている。それは、アメリカ合州国が今やイラク戦争において出口のないトンネルに入り込んで来ていると多くの人が考え、感じ出して来ていることだ。

### 3

ここで少しベトナム戦争のことを考えておきたい。ただ、そのまえにここで言っておかなければならないのは、ベトナム戦争についてのアメリカ人と日本人の認識のちがいだ。アメリカ人の多くは、ベトナム戦争遂行の中心人物だった、それゆえにこそ戦争がそのころよく「マクナマラ戦争」と呼ばれた当時の国防長官ロバート・マクナマラが戦後、『回顧録』『回顧して』(Robert McNamara, *"In Retrospect"*, Times Books, 1995) のなかで明瞭に述べているように、ベトナム戦争はまちがったやるべきでなかった戦争だった——と考えているにちがいない。イラク戦争でイラクの「大量破壊兵器の保有、隠匿」を国務長官として自分もあまり信じていない自信なげな口調でしゃべったコリン・パウエルも、彼の自伝『私のアメリカの旅』(Colin Powell, *"My American Journey"*, Random House,

1995)のなかで、あの戦争は「われわれはここにいる、なぜなら、われわれはここにいるからだ」(“We’re here because we’re here”)の戦争だったと辛辣なことを使つて多くの戦争がそうであり、そうであつて来たように「戦争のための戦争」だったと述べていた。そして、もうひとつ大事なことは、ベトナム戦争はアメリカ側の文句なしの敗戦において終わった戦争だったことだ。これも多くのアメリカ人が今考えていることだ。

逆に日本人には、今もつてあの戦争はどちらが勝つたか判らない戦争だったというような言い方をしている人がいる。そうした認識のおかげか、ベトナム戦争はべつにまちがつた戦争ではなかつたと考えている人たちもいる。これでは、アメリカで今、イラク戦争がベトナム戦争の様相を呈して来たかという批判がどれだけブッシュ政権にとつてきびしいか、致命的な批判であるかが判らないだろう。手きびしい、致命的な批判であるとともに、もつともいやな、彼らが聞きたくない批判だ。

#### 4

まず、はつきりさせておきたいのは、ベトナム戦争において、アメリカ合州国が敗れたという事実だ。勝ち負けが判らない戦争だったのである。アメリカが完全に敗れた戦争だった。そのところで誤解があつてはならない。

ベトナムのベトナム戦争における目的は、ベトナム戦争は、ベトナム人たちの言い方によれば、ベトナム側によれば過去の植民地回復をもくろんだフランスを相手とした「フランス戦争」とそれを引き継いだかたちで行なわれたアメリカ相手の「アメリカ戦争」に分かれるが、どちらの場合において



も、戦争の目的はフランスであれアメリカであれ、自分を支配しにかかる外国勢力をベトナムの地に追い出すことであつた。

まず、フランスをベトナムの外に追い出すことができたことで、「フランス戦争」はベトナム側の勝利に終わった。ついで、「アメリカ戦争」でもアメリカをベトナムの外に追い出すことで、これも文句なしのベトナム側の勝利だつた。べつにベトナムはアメリカ合州国の領土内に攻め入つて、そこにベトナム側好みの政権を打ち立てようとしたのではなかつた。「アメリカ戦争」のあいだ、ベトナム側はくり返して「出て行くのに敷物カイベツトを敷いてあげる。だから、出て行つて欲しい」と言つた。長い戦いのあげく、たしかにベトナム側は完全にアメリカを追い出した。ベトナムの戦争目的はこれで完全に達成された。ベトナムは完全に勝利し、アメリカ合州国は完全に敗れた。

ただ、ベトナムの勝利は、文字通りの「惨勝」だつた。戦争は究極のところ殺戮と破壊だが、二つともに「惨勝」したベトナム側に一方的に集中している。何より端的な数字をあげておこう。アメリカ側の戦死者五万八千人余に対して、ベトナム側の戦死者は、正確に算定されたことはないし、それはまず不可能だが、軍人、民間人あわせて最低の推定で二百万人だ。

アメリカ合州国内にベトナム側の砲弾は一発も落ちていないが、日本の半分足らずの面積、人口千八百万人の「南」ベトナムに投下された砲弾、爆弾は一千万トン、枯れ葉剤五万五千トン。この五万五千トンによつて全土の面積の三割以上、森林地帯の五分の一が汚染され、被害を受けた。枯葉剤に被曝した人口はおよそ四百八十万人。そして、百万人ものベトナム人が今もつてさまざまな後遺症に苦しんでいる。

まさに、ベトナム側の勝利は「惨勝」だった。この事実は忘れてならない事実だ。しかし、同時に、ベトナムの戦争で勝利したのはベトナムであって、アメリカ合州国でなかった。これも事実としてまぢがいなくあつたことだ。

## 5

ベトナム戦争でアメリカ合州国側がかかげた「アメリカ戦争」の大義名分は、「民主主義と自由」の擁護だった。今や、ベトナムを始めとして東南アジアのその地域は次から次に「共産主義」の悪魔に奪われようとしている。これは「民主主義と自由」の危機だ。それがそのころよく喧伝された「ドミノ理論」だが、その将棋倒しの悪魔の動きをベトナムにおいて阻止せよ——これが「アメリカ戦争」の大義名分で、それにおいてただの植民地復活戦争だった「フランス戦争」とちがったものとしてあつた。いや、あつたはずだったが、実際はそうではなかった。

そうではないと考え出したのは、当のベトナム人たちだけではなかった。アメリカ合州国の内部でも、ヨーロッパでも、日本でも、「アメリカ戦争」は結局、「フランス戦争」をそのまま引き継いだものだと多くの人が考え出し、ベトナム反戦運動は世界大の規模で盛り上がり、ひろがった。

反戦運動の人たちばかりではなかった。すでに述べて来たように、「アメリカ戦争」の当事者のマクナマラやパウエルも、この「アメリカ戦争」はまちがった、やるべきではなかった戦争だと考え出した。彼らばかりではない。兵士たちも多くが、いつたいこの戦争は何だ、何のために自分たちは戦争をしているのかと考え始めた。私はそのころ、ベトナム戦争に反対して「ベ平連」の名で今はよく

知られている市民運動をかたちづくり、自分でも参加していたが（「ベ平連」の正式の名称は『ベトナムに平和を！』市民連合）。この市民運動は一九六五年から九年近くつづいた）、この運動のなかでの重要な活動のひとつは、ベトナム戦争に反対してアメリカ軍を脱走して来た「脱走兵」や、さらに基地内で反戦活動を始めた「反戦兵士」を支援する活動だった。私はその活動のなかでいわば生身の兵士たちと接していたから、今述べた当時の兵士のありようについての私のことばは、ただの推測に基づいたことばではない。実際に彼らと接した体験に基づいて、私は今当時を思い出しながら書いている。

ベトナム戦争での「アメリカ戦争」の大義名分は、初めはたしかに「民主主義と自由」の擁護だった。その土台として将棋倒しの「ドミノ理論」が組み立てられていて、その理屈でただの植民地回復、再度の獲得のための「フランス戦争」とちがうと強調された。しかし、戦争が長引くにつれ、トンネルの出口が見えないまま、いつのまにか大義名分は力を失なって、最後には、文字通りの戦争のための戦争、ただ戦争をつづけるための戦争になった。そのころには、マクナマラの下にいた大学教授が、この戦争は今やあからさまに言えば、米軍撤退の屈辱を避けるためだという理由が七割の戦争になったと、マクナマラに進言するまでになった。ベトナムとアメリカのパリ和平会議は、端的に言えば、その屈辱をアメリカ側に避けさせるための過程だった。ようやくそこで面子を保つ機会を得て、果てしなく長くつづいたトンネルから、敷物<sup>カーペット</sup>はなかったもののアメリカ合州国は出て行くことができた。しかし、今、イラク戦争にその出口はあるのか。出口があるとすれば、それがどんなかたちの出口なのか。ブッシュ政権側の思惑では、出口はアメリカ合州国の世界制覇、世界支配で、「アメリカの世紀」

の実現しないが、そんなことができるのか。また、そんなことを世界はアメリカ合州国にさせていいのか。

## 6

こうした事態の進行のなかで、今、二つ、重要な問題が出て来ている。

ひとつは、そのトンネルのなかに、アメリカ合州国は今、世界の多くの国を引きずり込もうとしていることだ。もちろん、すでに引きずり込んだ国がいて、それが「同盟国」だが、そうアメリカ合州国によって呼ばれ、みなされ、自分でもそうあることをよろこんでいる国もいて、日本がまさにその一国だが、そういう国に対してはさらに自分の世界制覇、世界支配の野望実現のために「同盟」の中身を変えもすれば、強化、拡大する。それがまさに今、在日米軍の再編の名目で行なわれて来ていることだが、これによって、米軍は日本をうしろ楯として、世界のどこにでも出て行けるし、場合によっては自衛隊も共同作戦に出る。すでにそのための地ならしはイラク戦争において行われた。

もちろん、アメリカ合州国の世界制覇のためのこのトンネルのなかに入ろうとしない国も、アメリカ合州国の側で入れようとしめない国もある。後者は「北朝鮮」、イランなどのテロ支援国家とアメリカ合州国側が一方的に決めつける「悪の枢軸国家」だが、これらの国がアメリカ合州国のトンネルの外でこれから生きつづけて行けるかどうかは判らない。かつてのイラクのように、アメリカ合州国が叩きつぶして、そこに自分好みの政権をつくってトンネルのなかに入れてしまおうとするかも知れない。

今、トンネルの外で、そこへ入らないことを明確に態度で示しているのは、キューバ、ベネズエラ、

ボリビアのラテン・アメリカの三国だろう。これまでそうした態度をいやおうなしに長年とつて来たのはキューバだけだったが、今、ベネズエラ、ボリビアも明確にその態度を打ち出して来た。この三国がどれだけ他のラテン・アメリカ諸国に力を及ぼすかは、これからの世界のあり方を決める大きな要因となるにちがいない。

そこへ行くと、中国もロシアも、トンネルの外に在ることはたしかだとしても、このラテン・アメリカの三国ほど明確な態度をとっていないように見える。他のアラブ諸国もアフリカ諸国も同じだが、もう少しトンネルをアメリカ合州国が広くしてくれれば、よろこんで入るのではないか。その上でそこへ入って、アメリカ合州国と同じ「強大国」として、世界に君臨するというまことに志の小さいことを（それは世界の未来にちがう方々を求めるラテン・アメリカ三国の志の大きさと比べれば情けないほど志の低い、小さいことだ）、ロシアも中国も考えているように見えて来ている。

## 7

トンネルに入ること、あるいは強引に押し込まれることで、アメリカ合州国の力づく政治の強行で、各国それぞれの国内政治は改変を余儀なくされる。これも今各国で明瞭に見えて来ている事象だ。このもつとも端的な例として、「ブッシュのポチ」と言われて来た小泉純一郎首相政権下、またそれ以後の日本における「改憲」の動きをあげておきたい。アメリカ合州国の世界制覇、世界支配に日本を全面的に協力させることにおいて、何より障壁となるのは戦争放棄、軍事力放棄の「九条」をもつ日本の「平和憲法」だが、何としてでもその根幹にある「九条」を捨てさせるか、それができな

いのなら、第一項はそのままだにして、「九条」の核心と言うべき第二項を変えて、実質上、全体として「平和憲法」を骨抜きにする。これが、今、アメリカ合州国がかたちづくったトンネルのなかで行われて来ていることだ。今、アメリカ合州国にとって必要なことは、日本が「改憲」して戦争ができる——アメリカ合州国とともに、またそのために戦争ができる国にすることだが、「改憲」はその目的に合わせて、今、何としてでもアメリカ合州国が日本にやらせておかなければならないこととしてある。

## 8

そして、こうしたことは軍事面だけに限られたことではない。今、トンネルのなかの多くの小さい国が直面しているのは、アメリカ合州国が他の先進国とともに巨大な経済力を背景にして押し進める経済の「グローバリゼーション」だが、これは小国の経済を押しつぶすかたちで進行して来ている。この進行でもっともひどい目に合うのは、労働者、農民、社会的弱者、貧者たちだ。アメリカ合州国を中心にして、他の先進諸国がそこにむらがつて推進する「グローバリゼーション」は豊かな国、豊かな人たちをさらに豊かにし、貧しい国、貧しい人たちをさらに貧しくする。これで世界は、いったいどういうことになるのか。

## 9

こうした「九・一一」以来のアメリカ合州国中心の動きは、世界全体をそれ以前のものとは大きく

ちがったものに仕立てあげようとしている。「九・一一」の事件自体が変えたのではない。それ以後の事態の進展が変えようとしている。

ここで見過ごしてはならない重要な問題がもうひとつある。それはこれまでに述べて来たことは眼に見えるかたちでの世界の変化だが、眼に見えないかたちでのもつと人びとの心、精神の領域に入り込んで存在し始めている変化だ。この不可視の領域での変化が可視の変化を支えている。

この変化にはいくつものことがある。

ひとつは、まず、アメリカ合州国の力のゴリ押し政治がその力のゴリ押し効果として世界各地で「テロリスト」たちに「テロ」実行の理由、口実をあたえて「テロ」が実際世界各地で起きて来て、それはそれで力のゴリ押し政治の錦の御旗の「テロ撲滅」におスミつきをあたえてアメリカはいつそう力のゴリ押し政治を強化し、拡大する——このイタチごつこのなかで世界大に、人びとが平時、平和の安定、静謐を失なうて、今にも戦争が始まる。いや、始めなければならぬと考えるような気分次第に追い込められつつあることだ。戦争の場合、最後に頼りになるのは何と言ってもアメリカ合州国の世界第一の強大な軍事力だということに事態はなる。そう人びとが考えれば、それだけいつそうアメリカ合州国の世界制覇、支配は実現する。

ここで大きく姿を現して来ているのは、「戦争に正義はある」「正義の戦争」がある」の認識であり、思考だろう。それが、今、世界全体に大きく拡がって来ているようだ。私は、今、世界のありようをそう読みとっている。これが、私がさつき言及した世界の不可視の変化の本質だ。

「戦争に正義がある」「正義の戦争」がある」の認識、思考はどの国、どの社会にあっても古来から

ある認識、思考だ。これに対して「戦争には正義はない」「正義の戦争」はない」の認識、思考は、この古来からの認識、思考にまっこうから逆らう異常、異端の認識、思考で、古来からあつたとしてもごく少数者だけがもつて来たものだった。もつと端的に言えば、古来、ごく少数の狂信者<sup>ファンナティック</sup>だけがもつて来た、そうみなされて来た認識、思考だ。それがすくなくとも少数の狂信者だけのものではないとさえ、いぜんとして異常、異端、常識はずれのものであつても、まともで正当な認識、思考である世界的に「市民権」をもつて認められるようになったのは、第二次世界大戦以後のことだ。その意味では、この「戦争に正義はない」「正義の戦争」はない」の認識、思考はきわめて新しい認識、思考だと言つていいにちがいない。

この「戦争に正義はない」「正義の戦争」はない」の認識、思考が第二次世界大戦以後ようやく「市民権」をもつて認められるようになったのには、次の理由がかかわっている。

戦争はたいていいつも平和を求めてなされて来た。戦争はよくないが、これは平和確立のためにしなければならぬ戦争だ。これによつて、このいわば「必要悪」としての戦争によつて、戦争は打ち始めになつて、あとはめでたく平和が来る——これが古来くり返されて来た戦争の大義名分だが、変らず戦争はつづいた。打ち始めにならなかつた。しかし、もうほんとうに打ち始めにしなければならぬところには世界は来ている。それは武器の発達（発達の究極に核兵器がある）のおかげで、戦争があまりにも多数の死傷者を出すようになったからだ。そして、これも武器の発達のおかげで、戦争の範囲が無制限に拡大されて、非戦闘員の民間人、市民をいくらでも巻き込むことになった。死傷者の大多数がただの市民になった。第二次世界大戦がその究極の事例を示していた。



死傷者ではなく死者だけの数字だが、いろんな数え方があっていちがいには言えないが、二十世紀での戦争による死者の数は五千万人だと言う人もいれば、いや、八千七百万人だと言う人もいる。そして、強制収容所などで政治的に殺された死者の数は八千万人——あわせて一億六千七百万人が戦争と政治がらみで殺されたと見ていいと論じている人もいる。そして、民間人≡市民の死者は第一次大戦における五パーセントが第二次世界大戦となると、それが一挙に四十八パーセントにはね上がり、そのあとの戦争のことも少し言っておけば、朝鮮戦争では八十四パーセント、ベトナム戦争に至っては九十五パーセント——つまり、死者の大部分がふつうの市民だ。

「戦争に正義はない」「『正義の戦争』はない」の認識、思考が一部の少数の狂信者のものではない、まともな認識、思考として第二次世界大戦後考えられて来てもふしぎはないにちがいない。このまともな認識、思考を一国の国の基本として定めたのが日本の「平和憲法」、その「九条」だった。

## 10

ここであらためて強調しておきたいのは、「平和憲法」「九条」が平和主義の理想や理念だけからかたちづけられたものでないことだ。それは今述べた第二次世界大戦の悲惨な戦争の歴史的現実にしつかり根をおろしている。平和主義の理想、理念が戦争の悲惨の歴史的現実——大きくまとめ上げて言えば、「戦争に正義はない」「『正義の戦争』はない」を誰にも納得させ得るむき出しの歴史的現実に強固に結びついている。

ここで言う戦争は、中国やアジア各地に対して「侵略戦争」を行なった日本の戦争——「日本戦

争」だけではない。あるいは、ヨーロッパを蹂躪し非道のかぎりをつくしたナチ・ドイツの戦争——「ドイツ戦争」、その附属物としてあつたファシスト・イタリアの戦争——「イタリア戦争」だけのことではない。こうした「不正義の戦争」に立ちむかつたアメリカ、イギリス、その他の連合国の戦争——「アメリカ戦争」「連合国戦争」、あるいは、連合国とともにナチ・ドイツと必死に戦つた旧ソ連の戦争——「ソ連戦争」——それらすべて、当時の世界の人類の敵だつたナチズム、ファシズム、軍国主義に対して戦つた、その大義名分をまちがいなくもつていた、それゆえに「正義の戦争」をして来た、またそうされて来た「アメリカ戦争」「連合国戦争」「ソ連戦争」をふくめて、第二次世界大戦で戦われたあらゆる戦争——それらがすべて「戦争に正義はない」「『正義の戦争』はない」の認識、思考のもととなるむき出しの悲惨を世界各地に現出させた。

これは何もふしぎなことでも、逆説的なことからでもない。どのような戦争であろうと、正義の戦争であろうと、不正義の戦争であろうと、戦争の当然の帰結としてあることだ。

「正義の戦争」はもともと勝たなければならない戦争としてある。私が手もとにおいて第二次世界大戦をアメリカ側から書いた歴史書としてよく参照するハーバード大学出版部から出た歴史書の題名は、まさに「勝つべき戦争」(*"A War to be Won"*, Harvard Univ. Press, 2000)だが、「勝つべき戦争」の「正義の戦争」が相手とするのは論理的にも事実においても、不正義の戦争を行なう敵だ。こうした敵は、どんな邪悪な手段を使つても戦争をするにちがいないのだから。この敵に勝つためには、「正義の戦争」をする側もきれいごとを言つていられない。相手同様どんな手段を使つても勝たなければならぬ。それでどういふことになるか。日本を相手としたアメリカ合州国の「正義の戦争」——「アメ

リカ戦争」の場合で考えてみよう。

「日本戦争」でまず日本が始めたのは、中国各都市に対する無差別爆撃だった。満州の都市に対する爆撃から始まって南京、武漢、重慶に対して、皇軍爆撃機は必然的に住民の犠牲をとまなう無差別攻撃を長期間にわたってやってのけた。これに対して戦争末期に行なわれたのは、アメリカ合州国による日本の都市に対する無差別爆撃——都市焼きつくし空襲だった。それは戦闘力において日本よりはるかに立ちまさるアメリカ合州国軍によるものだっただけにはるかに大規模で、徹底して行なわれた。そのころ大阪に住んでいた私は、この一方的な殺戮と破壊としか言いようのないこの都市焼きつくし空襲を体験している。大阪が受けた空襲は総数で五十回、そのうち都市焼きつくし空襲は八回だとされているが、この一九四五年三月一四日の夜間空襲に始まり、八月一四日午後、日本の降伏を告げる天皇の「玉音放送」の二〇時間前までの昼間大空襲に至るまでの八回の都市焼きつくし空襲を最初の三月一四日夜間空襲と六月一五日の昼間大空襲、そして、最後の八月一四日午後の大空襲の三度、幸か不幸か、わが家に落下した小型爆弾の発火を母親と一緒に消火したりして、大阪市内の中心近くに住みつづけたおかげで、私はまさにもろに体験していた。

## 11

この都市焼きつくし空襲を対日爆撃において発案し、実行したのは、当時、ヨーロッパ戦線からマリアナ基地に転任して来て対日爆撃作戦の指揮官となったカーティス・ルメイだった。彼は転任して来るとすぐ、それまでの対日爆撃が軍事施設を目標とした一万メートルほどの超高度からの照準機を

使つての爆弾投下を主力とした精密爆撃で効果をあげてはいなかった事実を見て、低高度千、千五百メートルからの焼夷弾を使つての市街地無差別爆撃、つまり、都市焼きつくし空襲に強引に対日爆撃を切り替えさせた。その都市焼きつくし空襲が本格的に行なわれたのが一九四五年三月一〇日の東京に始まり、一二日、名古屋、一四日、大阪、一六日、神戸とつづいた夜間大空襲だが、それ以後、都市焼きつくし空襲は日本全土にひろがり、日本のめばしい都市はすべて焼きつくされて、日本は敗北へ急速に追いつめられた。

まさにこの都市焼きつくし空襲は多大の戦果をあげたと言うべきものだったが、焼きつくしたのは家屋、建物だけではなかった。住民の生命も、首都の三月一〇日の東京空襲の場合の一夜にして十万人余を皮切りに、無数に焼きつくされた。そして、この焼きつくされた住人の多くが、老人、女性、子供だった。この事実は、彼らの上に焼夷弾を投下したB-29「超空の要塞」爆撃機の搭乗員たちも知っていた。爆撃機は低空で飛行していたから、地上から人間の肉が焼かれる臭いが機内にまで臭つて来た。多くの搭乗員が、いったい自分たちは何をしているのかと考え出していた。戦争がすでに五六年後、二〇〇一年にアメリカ合州国で出た第二次世界大戦の歴史書は搭乗員たちの当時の発言を引用してそう述べていたが(ドナルド・ミラー『第二次世界大戦物語』——Donald Miller, "The Story of World War II", Simon & Schuster, 2001) 同書によれば、彼らをその都市焼きつくし空襲に従事させたカーティス・ルメイは、戦後、「もし自分たちが戦争に負けていれば、自分はまちががなく戦犯裁判に引き出されていたことだろう、幸いにして、自分たちは戦争に勝つ側にいた」、<sup>インモラル</sup>「戦争はすべて不道德だ。道徳<sup>モラル</sup>を考えれば、戦争に勝てない」と公言していた。

このカーティス・ルメイを戦後一九六四年秋に日本政府は招き、「航空自衛隊の育成に功あり」として勲一等旭日大綬章を授与した。そのとき彼は空軍大将となり、アメリカ空軍参謀長の地位についていたが、こうした高位の勲章は天皇が自ら授けることになっているから、天皇は彼に直接授けたはずだ。まさにやりきれない不道徳な話だが、当時はベトナム戦争のさなかだ。彼はそのあと、「ベトナムを空爆によって石器時代に戻してやる」とこれも公言して、「北」ベトナムへの空爆——「北爆」を始めた。

## 12

こうした事例は、いかに「戦争に正義はない」「正義の戦争」はない」を具体的にもつともあざといかたちで示す事例だが、都市焼きつくし空襲の究極として「正義の戦争」の「アメリカ戦争」が行なったのが広島、長崎に対する原爆投下だ。

これがいかに「戦争に正義はない」「正義の戦争」はない」事例であったかは、ここでくわしく論じる必要はないだろう。ただ二、三、指摘しておきたいことがある。まず、ひとつ言っておきたいことは、広島、長崎に対する原爆投下がそれだけ孤立した行為として行なわれたものではないことだ。それはあくまで都市焼きつくし空襲の果てに、その一端として行なわれたことで、空襲の当事者の軍人たちは、原爆投下が人類の歴史を一変させたと軍の外の思想家たちがあげつらうような事態だとは一向に考えていなかったにちがいない。その証拠に原爆投下後にアメリカ合州国は都市焼きつくし空襲を変わず継続していて、すでに述べたように、八月一四日、戦争が終わる二〇時間まえに大阪は、

大阪が受けた空襲のなかでおそらく最大規模のものを受けている。私はそのときそこにいて、「お国の政府は降伏して、戦争は終わりました」と日本語で書いたビラを、大きな空襲のあとは「黒い雨」が降るものだが、その「黒い雨」がつくった水たまりの泥のなかから拾った。

B 29 「超空の要塞」爆撃機は、そのビラをその日の最大目標だった「造兵廠」の巨大な兵器工場に一トン爆弾を無数に投下するとともに上空から撒き散らした。私の住居は、その空襲で完全に破壊された当時「東洋一」の規模をもつと言われた兵器工場の近くにあつたから、当然、一トン爆弾は私の住居のつい近くにも落下した。私と私の一家はそのかたちで生きのびた。

## 13

ビラを読んで、私は呆然として立ちすくんだ。もちろん、私はビラの文面を信じなかったが、二〇時間後、「玉音放送」は敗戦を告げた。敗戦が決まっていたのなら、なぜ、アメリカ軍は空襲をしたのか。多くの市民が殺されなければならなかったのか。いったい、彼らは何のために殺されなければならなかったのか。

私にとって、戦争は「日本戦争」「アメリカ戦争」とともにその疑問とともに終わり、「戦後」はその疑問とともに始まっている。私はその疑問から、戦争とは何か——を考えるようになっただけではなかった。国家とは何か、日本とは何か、日本の中心存在だった、そのはずだった天皇と天皇制のことも考えるようになった。その私の認識、思考の一端を、私はこの本に収めた「いったい彼らは何のために殺されたのか」に書き、さらに詳細を私の最近の著作『玉碎／Gyokusai』（岩波書店・二〇〇六）

のなかの「私の『玉碎』へのかかわり、思い」で述べているので、ここではこれ以上書かない。ここで言うっておきたいことは、カーティス・ルメイの例で示すように、彼ら軍人にとっては、戦争はもともと不道徳であるのだから、原爆投下も都市焼きつくし空爆の一環であつたにすぎなかつたことだ。道徳上の問題も思想的意味も、そこにはなかつた。

もちろん、ルメイが言うように、戦後戦犯の法廷に、戦争に勝つ側にいた原爆投下の責任者たちがひつぱり出されることはなかつた。

## 14

私は自分の住居の仕事部屋兼寢室の壁に、私が三度体験した都市焼きつくし空襲の二番目の一九四五年六月一五日の空襲の写真のコピーを額に入れてかけている。「ニューヨーク・タイムズ」の六月一七日の日曜雑誌に出していた写真をコピーしたものが、空襲の写真と言つても、爆撃するB<sub>29</sub>「超空の要塞」爆撃機から撮つた写真で、黒煙と白煙が地図状に見える大阪の市街を覆つてひろがるだけの写真だ。

私とその写真のコピーを壁にかけているのには、二つ理由がある。

ひとつは、その完全に市街を覆う黒煙と白煙のひろがり、写真で見ているかぎり、ただの黒煙と白煙のひろがりだが、その下、あるいは、内部は文字通り火焰の現場だつたからだ。ぶあつい煙で覆われていたので、昼間空襲だつたが、夜中とひとしい暗黒のなかで火焰は噴き上がり、火焰とともに巻き起こつた熱風がさらに火焰を周囲に吹きつける。そのさまはまさに火焰の地獄だつた。地獄のな

かに私はいた。

ただ、私が写真のコピーを壁にかけているのは、その地獄の現場を記憶しておくためからだけではない。もうひとつ、似たような黒煙と白煙のひろがりの光景を、写真なりニュース映画の場面なりで私自身が都市焼きつくし空襲の体験をもつようになるずっと以前に見たことがあったからだ。それは、当時、「支那事変」と言われた「日中戦争」——日本の中国に対する侵略戦争での南京、重慶など中国各都市に対する「皇軍」爆撃機からの同じように都市焼きつくし無差別空襲の写真なり、ニュース映画の場面だった。そのとき、私が「皇軍」の勝利によるこんで拍手喝采した記憶はない。私は何の気なしにただ見ていた、見過ごしていた。それは、おそらく、大阪空襲の黒煙と白煙のひろがりの写真をただ見ていた、見過ごしていたにちがいない当時のアメリカの少年の反応と同じだった。

彼らもべつにその写真を見てアメリカ軍の勝利によるこんで拍手喝采してはいなかったことだろう。たぶん、ただ何の気なしに見ていた。見過ごしていて、黒煙と白煙のひろがりの下に、その内部に火焰の地獄が出現していたことなど想像もしていなかったにちがいない。私も同じだった。私も中国空襲での黒煙と白煙のひろがりを何度も眼にしていながら、その下、内部にどんな火焰の地獄が出現しているのか、考えたこともなかった。

## 15

私が壁に大阪空襲の黒煙と白煙のひろがりの写真のコピーを壁にかけているのは、そうした過去の自分のありようがあるからだが、中国の都市に火焰の地獄を出現させたのは、もちろん、日本だ。日



本は中国を初めとしてアジア各地に侵略戦争を強行して、まず殺し、焼き、奪う歴史を強いた。その結果として、自分が今度は都市焼きつくし空襲がもつともむき出しに具現しているように殺され、焼かれ、奪われる歴史をもつた。

私は「支那事変」、さらには、それ以前の「満州事変」「上海事変」に始まり、「大東亜戦争」の敗北に至る「日本戦争」の歴史の総体をそうとらえて、殺し、焼き、奪う歴史をくり返してはならないと考えて生きて来ているのだが、もうひとつ大事なことで考えてるのは、この殺し、焼き、奪う歴史の展開を阻止しようとして、その意味で「正義の戦争」を行なった、そのはずのアメリカ合州国やイギリスや他の連合国、あるいはソ連の「アメリカ戦争」「連合国戦争」「ソ連戦争」も、結局、都市焼きつくし空襲、さらには原爆投下が象徴し、具現する「戦争に正義はない」「『正義の戦争』はない」事態を出現させていたことだ。

この事態を体験しての帰結はこうなる。どんな大義名分があろうが、主張されようが、とにかく戦争はわるい。やめなければ、やめさせなければならぬ。私は日本の「平和憲法」、「九条」はこうした悲惨の冷厳な事態からの憲法であり、条文だったと考えている。それは、さつきから私が言ってきたように、「平和憲法」も「九条」もただの理想、理念に基づいてかたちづくられた憲法、条文でなかったことだ。それは歴史の現実にも強固に結びついている。

## 16

広島島の原爆の慰霊碑に「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」のことがあつた。主語

を欠いた、原爆投下の責任の所在を曖昧にしたとよく批判されることばだが、それが原爆投下国のアメリカ合州国に気がねしてのことばでなかったとするなら、私はこれほど殺し、焼き、奪う歴史のはてに殺され、焼かれ、奪われる歴史を近代の歴史としてもつた日本、日本人の歴史の現実に即したことははないと考えている。理由はもう判っていただけだと思うが、まず私たちの近代の歴史の殺し、焼き、奪う歴史をアジアの他の民族に強いたのは、私たちの「日本戦争」だった。この「日本戦争」を打倒するものとして「アメリカ戦争」「連合国戦争」がなされた。それはたしかに「正義の戦争」であつたにちがいない。しかし、その「正義の戦争」によつて、私たちは殺され、焼かれ、奪われる歴史をもつことになり、都市は焼きつくされ、究極には原爆の投下がなされた。

この二様の過去をどのようにして私たちは克服してまつとうにこれから生きて行くことができるか、戦後、私たちはこの至難の問いに直面して来たと言える。そう問題をとらえるなら、過去の死者たちに対しては、アメリカ人、日本人、その他どの国の人間の別を問わず、現代に生き残つた人間として、「安らかに眠つて下さい 過ちは繰返しませぬから」と言うほかはなかつたにちがいない。そして、これからのことについては、「戦争に正義はない」「『正義の戦争』はない」の認識、思考に自分の生き方、考え方の基本を定めて、「平和憲法」「九条」を自分の国のあり方の土台とするほかに道はない。

私はそう考えている。

## 17

これはそれとはつきり意識していないにしても、あの時代を体験した日本人のかなりの部分が直感

的に把握して来たことではないかと思う。そして、この直感的に把握して来たものを、改憲の言論、動きが日増しに強くなつて来ている今も、直接あの時代を体験したことのないより年下の日本人にも強く引き継がれて来ているように、つづけて私は思う。日本人の今もよく口にする「いろんなことがあるが、あつて来たが、とにかく戦争だけはよくない。やつてはならないことだ」というたぐいのことばほど日本人が直感的に把握したものを言い表していることばはないだろう。べつに調査したわけではないが、これまでの私の世界のいろんな国の人々と接した体験から言つて、そうしたことばを口にする人の数は圧倒的に日本人が多いように思う。

私は、べつの意味で、戦争の本質をもつともよくからだで感じとつたのは、満州でいち早く司令官たちが日本に逃げ帰つた関東軍に置き去りにされて原野をさまよい歩いた、その途次で多くが死んだ日本の開拓民たちでないかと考えている。「日本戦争」の北辺の護りの最先端に立つていた、そのはげの関東軍が逃げて陛下の股肱の臣であつた大日本帝国軍隊の本質をむき出しにしたあと、人間解放を標榜する社会主義国軍隊のソ連軍が入つて来て今度は兵士の多くが略奪、女性を暴行して「ソ連戦争」という「正義の戦争」の本質をこれもむき出しに見せた（「ソ連戦争」はヨーロッパ戦線のベルリンにおいて犠牲者の数二十万人に上るといふ女性に対する暴行を派手にやつてのけた、ベルリンに住んでその事実をいろんなかたちで聞き知つた私は半ば冗談に、しかし、半ば以上真面目に、「正義の自由主義戦争は原爆を投下し、正義の社会主義戦争は強姦した」と言う）。しかし、開拓民たちは日本が現地の住民に強制した、殺し、焼き、奪う歴史の結果として住民の土地を奪つて入植した日本人たちだ。彼らが殺され、焼かれ、奪われる歴史をそこで背負い込まれたとしても決してふしぎで

はない。その両様の歴史の果てに無事に日本にまで帰り着くことができた彼らの手記を読んでいると、きまつて最後が「とにかく戦争はよくない、するべきでない」だ。そのことばで手記は終っている。

## 18

ここで今少しドイツ——ナチ・ドイツの事例について書いておきたい。空襲において、殺し、焼き、奪う過去が殺され、焼かれ、奪われる過去となつて自分に立ち戻つて来た事例だ。スペイン市民戦争においていち早くゲルニカに空襲をかけて破壊しつくした「ドイツ戦争」の空襲は第二次世界大戦にあつては一九四〇年五月にオランダのロッテルダムで八一四人の住民を殺し、八万人の家屋を焼失させて、オランダの降伏を早めた。しかし、ドイツに対する「連合国戦争」の空襲ははるかに大規模で徹底したものだつた。一九四五年二月五日の「アメリカ戦争」のベルリン空襲は三万五千人を殺し、二月一三日から一四日にかけて、「イギリス戦争」「アメリカ戦争」連合してのドレスデン空襲も、最低同じく三万五千人を焼き殺した。その多くが「ソ連戦争」の攻勢から逃れて来た避難民たちだつた。ドレスデンは軍事施設のない、それゆえそれまでほとんど無傷だつた。そう信じられて来た中世以来の美しい都市だつた。しかし、一夜の空襲で、中心の大聖堂を始めとしてすべてが焼かれ、崩れ、そして、殺された。「アメリカ戦争」の当事者の將軍のなかには、この自分たちの空襲は「嬰兒殺し」だとして反対した人もいた。しかし、もちろん、空襲はつづけられた。

アメリカの作家カート・ボネガットは当時捕虜として、彼の言い方によれば十三万五千人の「ヘンゼルとグレーテル」を殺したこの「嬰兒殺し」の空襲を体験していた。のちに彼はこの体験を小説

にするのだが (Kurt Vonnegut, "Slaughterhouse-Five")、戦後、帰国したとき、この体験を話しても、そんなことをわがアメリカがやるはずはないと誰も信じてくれなかった。まれに信じる人が出て来ても、しかし、ドイツ人は何をユダヤ人にしたのか、何人のユダヤ人を殺したのか、ときまつてその人たちはことばを返した。

このカート・ボネガットの場合に照応するもののようにして、今は亡き日本の被爆詩人栗原貞子の「ヒロシマというとき」と題した詩がある。「ヒロシマ」というとき／へああ ヒロシマ」と／やさしくこたえてくれるだろうか／へヒロシマ」といえばへパール・ハーバー／へヒロシマ」といえばへ南京虐殺／……」。

## 19

こうした体験を経て、現代のドイツ人には、日本人同様、「戦争に正義はない」「正義の戦争」はない」の認識、思考が他の国の人間たちよりも強いが、とりわけ日本人の場合、その認識、思考に基づいて、「平和憲法」を根にした、また、逆にその根となる世界の他のどの国にもない民主主義についての独特の考え方をつくり上げて来た。そして、それは力おとろえて来たとは言え、まだまだ力をもつて残っている。

民主主義と自由を結びつけて考えるのはふつうのやり方で、ことにアメリカ合州国ではこの考え方が伝統的に強くて、「アメリカはどんな国ですか」と子供にきくと、たいていが「民主主義と自由の国です」と答える。こうした一般に伝統的に根強くある「民主主義と自由」の使徒としての自己認識

をもとにして、今、アメリカ合州国はそれこそ「アメリカの世紀」をつくり出そうとしているのだが、この「民主主義と自由」の認識と思考はアメリカ合州国ほどではないが、他の民主主義国にいくらでも見られる考え方だろう。日本の場合はどうか、あきらかに日本はいろんな意味での「自由」の乏しい国で、その代わり「民主主義とは選挙なり」の考え方がバツコしている国だが、ただひとつ、日本人の民主主義の積極的特質としてあるのは、民主主義を非戦、反戦、平和に結びつけて考える度合いが他の国にくらべて群を抜いて大きいことだ。大きくことをとらえて言えば、戦後の日本の民主主義はたしかにアメリカ合州国が持ち込んだものだが、日本は「民主主義と自由」に「戦争に正義はない」「正義の戦争』はない」の認識、思考に基づいた平和主義を結びつけて、日本独自の民主主義をつくり上げて来た。

この日本独自の民主主義はアメリカ合州国にない民主主義だっただけではない。イギリスの民主主義にもフランスの民主主義にも、その他世界の多くの国の民主主義に類例のないものだ。たいていの国において、「戦争に正義はある」「『正義の戦争』はある」の前提に立つ民主主義だろう。もちろん、どの場合も、「戦争に正義はある」「『正義の戦争』はある」の「戦争」には、「自分（たち）のする」の前おきがつく。

## 20

しかし、今、世界には日本以外にも、「戦争に正義はない」「『正義の戦争』はない」の平和主義の理念に立つ、あるいは、それを部分的に取り入れている国もある。前者が軍隊をもたないことを決め、

実行しているコストリカであるなら、ドイツは憲法に当たる「基本法」で、「何人も、その良心に反して、武器をもつてする戦争の役務を強制されてはならない」と定めている（『世界憲法集』岩波書店、一九八〇年）。これはかつて「西」ドイツで、戦後再軍備がなされたときに、「良心の自由」を決めた第四条に付加された条項だった。この条項によつてドイツは、「良心的兵役拒否」を法制度として認め、適齢にさしかかった男性青年は「軍事的奉仕活動」<sup>ミリタリー・サービス</sup>をするか「市民的奉仕活動」<sup>シビル・サービス</sup>の道を選ぶかの選択をし、後者を選択した場合、「武器をもつてする戦争の役務を強制され」る代わりに、老人、障害者介護などの「市民的奉仕活動」を行なう。今や後者を選択する若者の数は前者の若者の数より多くて、ドイツの福祉は彼らの参加なしには成立しないとまで言われて来ている。

そして、この法制度としての「良心的兵役拒否」は今やドイツばかりでなく、西ヨーロッパ諸国で広く行なわれることになって来ていて、もうこれがとりたてて取り沙汰されるまでもないほど、社会に受け入れられ、あたりまえのことになって来ている。

私の実際の主としてドイツの「良心的兵役拒否者」の若者たちとの二十年以上にもなる接触の体験から言うと、初めはそれこそその選択に自分の反戦、平和への志を込めたような人たちが多かったが、そのうち自分は「軍事的奉仕活動」より「市民的奉仕活動」にむいていると考えるので、こちらを選択するというような若者が多くなつた。これはおそらくいいことだ。

戦後長くつづいた「東」「西」対決の冷戦構造のなかで出現した「平和共存」は、「東」「西」ともに自らの大義名分を主張し、「戦争に正義はある」「正義の戦争」はある」を強力に実践して、軍事力、ことに核兵器の増強をはかつて来ているうちについにこのままでは世界は破滅するというところまで

来て、ようやく両者がその共通認識をもつに至ってしぶしぶやり始めたことだったが、これはこれで、皮肉なことに「戦争に正義はない」「正義の戦争』はない」と同じことになった。

そして、世界の破滅の可能性の共通認識と軍事力の拡大をないまぜにした「平和共存」の果てについて「東西」対決の冷戦構造は崩壊し、「戦争に正義はない」「正義の戦争』はない」の認識、思考は現実の政治の場で世界大に実現したかたちで平和が世界にもたらされた。いや、そう見えた。多くの国で軍縮への動きが始まり、軍事力を背景にしての対立のこれまでの事態のなかでは考えられもしなかった対立解消、融和が開始された。対立解消、融和のきわめつけが、「ベルリンの壁」の崩壊、「東」「西」ドイツの統一だろう。あるいは、朝鮮半島における「南北」対話の始まり。

しかし、戦争、紛争はかわらずつづいて来た。これも事実として世界にあって来たことだ。しかし、大きく言って、「戦争に正義はない」「正義の戦争』はない」の認識、思考はこれまでにない規模で世界に定着して来た。そう見えていた。



つづきは製品版でお読みください。